深紅の瞳

海崎 詩響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深紅の瞳

【Nコード】

N7705X

【作者名】

海崎 詩響

【あらすじ】

学校から帰る途中、柳刹那やなぎせつなはヴァンパイアに襲われる。逃げれなく、死を覚悟するがその時紅い髪の少女に助けられる。その少女との出会いが刹那の運命を変える。

第1話（前書き）

バトルストーリーを書くのは初めてです。誤字脱字などあると思いますが気にしない人は見てやってください。

アドバイスは絶賛募集中ですが、批判などは止めてください。挫けそうになるので…。

第1話

「な、何なんだ！？あいつは！？」

今俺はヴァンパイアらしき者から逃げている。

学校から帰る途中に人の首に噛みついていてるヴァンパイアらしきやつを見つけた俺は、危険と判断しすぐに逃げた。すると、そいつがいきなり追いかけてきた。明らかに、あの瞳の色はおかしい。目は赤く右手には刀を持っていてそして口から牙が見えている。無我夢中で逃げまわっていた俺だが、足が絡まりこけてしまった。

「マジかよ…、こんな所で死ぬのかよ。」

奴は俺の顔を見てニヤリと笑うとこっちに迫ってきた。

俺は目を閉じた。だが一行に襲われない。目をあけると、そこには倒れた化物と日本刀を持った紅い髪の少女がいた。

「大丈夫？怪我してない？」

「あ、ああ…。それよりこれは…。」

「それより、まずはここから離れましょう。詳しい話はまた後で。」

「わ、分かった…。」

その少女とここから離れようとした瞬間、いきなり襲ってきた奴が起き上がり襲ってきた。だが狙いは俺や紅い髪の少女ではなく、同じ学校から帰っていたクラス的女子を狙った。しかも、その女子は全く気づいていない。奴は刀で斬りかかろうとする。紅い髪の少女は急いで刀を抜き斬ろうとするが間に合わない。このままでは危ないと思つた俺は全力で走り彼女を突き飛ばした。すると奴は俺の左目から胸まで斬り込み首に噛みついてきた。ビックリした彼女は悲鳴をあげて逃げた。

「ぐわあ〜！！！！！」 斬られた痛みと噛まれた痛みが同時にきた。

この時俺は死ぬな、と覚悟した。

「やめろ！！！！！」

紅い髪の彼女は刀を抜き奴の胸に突き刺し、その後首を斬り落と

した。俺は倒れこんだ。どうやら立つだけの力がなくなっただらしい。

「おい！死ぬな！！今から助けてやるからな！」少女は俺の上の服を破ると、自分の刀で親指の皮を斬り、その血で胸に何かを斬りはじめた。

そこで俺の意識はなくなった。

「…き…。」

(誰か呼んでる…。)

「頼むから起きてくれ！」

「ああ、起きるよ。」上半身だけ起こした俺はいきなり抱きつかれた。「よかった、本当によかった。」

「おいおい、泣くなよ…。」「だって私のせいで、あなたは死にかけたんだから…。」

「だけど、助けてくれたのは君だろ。感謝してるよ、ありがとう。」

「お礼はこちらがしないといけないわよ。とりあえず、一旦貴方の君の家に行かせてちょうだい。そこから詳しい話を言うから。それと…。」

「どうした？」

「私が服を破ってしまったから、上半身裸で正直私はあまり男の裸には慣れてないんだ…、代わりにこれを着てくれ、すまない。」

「(の割にはチラチラと見るのはなんだかなあ…。) わかった、ありがとう。」

俺は彼女から服を借り自宅へと向かった。

第1話（後書き）

短くてすみません。

少女の名前は次の話にでも出したつもりです。
て一週間に一回はしたいです。

更新はがんばっ

第2話（前書き）

今の自分にはこれが限界です……。長文が辛い……。

第2話

（柳家）

「まず襲ってきたやつについてだけど、見た目で分かると思うけどやつはヴァンパイア。やつらは夜になると人を襲い、血を奪う最終的には感染させる。」

「感染？」

「奴等に噛まれるとウイルスが入りこみ、12時間後に化物に変わってしまう。必ずしもヴァンパイアになるとは限らず、デーモンになったりワーウルフになったりする。だが皆共通しているのは一度なると人間には二度と戻れず、人を襲うだけの屍になってしまう。」

「ちよつと待て！俺噛まれたよな！俺は化物になるのか！？」

「だから、君にはペンダントをあげたんだ。」

俺は胸を見ると真ん中に のついたペンダントをつけていた。

「それは、ウイルス等を封印する事が出来る。よって君は化物にはならない。もう一つそれには能力があるんだが君には関係ないから気にしないでいい。それあのヴァンパイアの事なんだが、奴はネクロスパイルルと言う魔界から来たんだろう。化物にもいろいろな種類種族がいるからね。ヴァンパイアは比較的頭もよく力も強いおまけに生命力も強いから、なかなか倒せない。あときは、油断してしまった。すぐに死んだと思っていたからさ。本当にゴメン。」

「気にするな。」

「ゴメン、最後に化物と言っているけど化物には二種類いて、一つは人間を襲う化物、通称ダークネス。もう一つは人間を守る者、君に分かりやすく言うなら精霊かな。精霊は人間を襲わずに力を貸してくれる。実際に私も借りているからね。少し脱線してしまっただけど何か質問は？」

「いろいろとまだ聞きたいんだがとりあえず気になってたんだが、まずは君の名前を教えてください。」

「そう言えばまだ言っていなかったね。私は時神 未来^{ときがみらい}。未来^{ときがみらい}って呼んで。」

「分かった、んで他にも気になるんだけど、未来と最初に会った時は髪が紅いのに今は黒いけどどうして？」

「それは、精霊の力を借りている間はそうなるんだよ。私は炎の精霊イフリートの力を借りてるから髪や目が紅くなるんだよ。」

「何か凄いな…。」

「まあね。それで、君にまた謝らないといけないことがあるんだ、左目の包帯外して鏡で自分を見て。」

鏡を見てと言われた俺は鏡を見て驚く。

「なんじゃ、この傷と目の色!？」

「私が頑張って治癒したけど、顔の傷だけは治せなかった。あと左目は本来なら見えなくなっていたのだけれど、噛まれたのがヴァンパイアだったおかげで、驚異の生命力と回復力で見えるようになってしまった。に私のせいだ、本当にごめんなさい…。」 未来が土下座をはじめたので俺は焦りながらやめさせようとする。

「だから謝らなくていいから!！」

「だけど、このままじゃ私の気がすまない!！」

「んじゃ、三つ頼み事を頼まれてくれたら、なしにするから。」

「何なりと、言ってください!何なら私のはじめ…。」言わせねえよ

!」「」「コホン、まず、一つもう謝らないで。二つ、今後も俺を守ってほしい。三つ皆を守る力を俺にほしい、それで稽古してほしい。」

「一つ目と二つ目は分かりますが、三つ目はいったい…。」

「聞いた話じゃあ、他にもたくさんダークネスがいるんだろ、そいつらが人間を襲ってるんだろ。俺みたいなのをこれ以上出したいから俺も戦って一人でも多くの命を救いたい。」

「分かりました。私の持っている力を貴方の為に、そして皆の為に使います!これが少しでも罪滅ぼしになるのなら。」

スッ

「え〜と、これは？」

「これから一緒に戦うんだから仲良くしないといけないからさ、まずは握手からさ。」

未来は一瞬悩みながらも刹那の手を握りしめた。彼女の手は暖かく、刹那の手もまた暖かった。

続く

第2話（後書き）

色々と厨二病っぽい名前や設定を出していると思いますが、それは作者が厨二病だからです。

第3話（前書き）

今回あるものを少しパクりました。そうでもしないと自分なりに納得のストーリーにならないからです。
批判はしないでください。

第3話

（柳家）

未「それであの〜2つお願いがあるんですけど…。」

刹「何？」

未「1つ目に私はこの世界へ来たばかりで、家がないんです…。だから、泊めてほしいんです！」

刹「なっ…！」

未来は立ち上がると

未「いきなりで迷惑ですよ…。すみません、忘れてください！それじゃ何かあつたらメールを…」

ガシッ

刹「いや、そのなんだ俺は別にいいんだが…。君が心配なんだ…。

俺は1人暮らして俺以外には誰もいないし、君は女の子でしかも美人だ。1つ屋根の下に過ごすからさ恥ずかしくないのかなあ〜って思ってたさ。」

未「全然平気！あなたなら襲わないって分かるから！」

刹「あ〜そう…。（もしかして男として見られてない！？）」

未「でも、…：…らべ…：…れ…：…かな。」

刹「何か言った？」

未「気にしないで！そう言えば私の荷物はどこにおけばいい？」

刹「荷物って何があるんだ？見えないだが…。」パチン！

未来が指を鳴らすとバックが現れた

未「私の世界から取り寄せたの。いやぁ宅配にすると高いわあ…。

まあ楽だからいいんだけど。」

刹「そつちの世界でも宅配あるのかよ！（口調変わってるけどこつちが素だな、多分。）」

未「そりゃあるわよ！こつちの世界っていったってあんまりこの世界と変わらないし。」

刹「そうなのか？」

未「この際だから私がいた世界の事を話すけど、まず私は時神未来
って名乗ってるけど、本当の名前じゃないの。本当の名前は親、兄
弟、精霊、結婚相手しか知らせちゃいけないの。そして、例えば知っ
ていても他の人がいる前で相手の本当の名前は言っではいけない。」
刹「何で？」

未「魔術や精霊召喚にはマナつまり体内エネルギーとでも言ったら
いいかな、マナが必要で許可を得てない人間に本当の名を呼ばれる
とマナが暴走し二度と魔術や精霊召喚が行えなくなるからなんだ。
だから、君には本当の名前は言えないんだ。ゴメン。」

刹「気にするな、他にそっちの世界とこっちの世界の違いは何かあ
るのか？」

未「あとは、車やテレビなど科学系の物が無い。そして私達の世界
の名前の総称はLARKラクと呼んでいる。」

刹「ん、LARKじゃテレビとかないのに、何で テレビの存在知
ってるんだ？」

未「それは、私の仕事に関係してるからさ。」

刹「仕事？」

未「私は、君らの世界じゃ神様みたいな仕事をしてるんだ。まあ、
下っぱなんだけどね。それでいろいろな世界を管理つまりその世界
が豊かにしたり貧しくならないようにこの世界では石油や天然ガス、
LARKではコアと言われる金属などを出しすぎず、足りなさすぎ
ないようにしてるんだ。話がそれた、私は管理と言っただけど実際は
警備する仕事为主で、上位の神様が各世界を回る際の護衛をしてる。
まだ私は地球には来た事がなかったんだけど、その時神様が地球に
よったから話を聞いていたから何となく地球の大体のものが分かる
んだ、……………ああ！」
刹「いきなりどうした？」
未「もう一つお願いしたいことがあったんだっ！」
刹「忘れるなよ！その要件！」

未「マジやってしまった！もう1つ、それはこの地域に散らばった宝剣の回収を手伝ってほしい。」

刹「宝剣？」

未「君にはネクロスパイラルからダークネスが出てきたと言ったね、ネクロスパイラルは様々な世界に存在し、地球のネクロスパイラルは10本の宝剣で君の地域の近くの不知火神社で封印されていたんだ、だが宝剣は100年に1度だけ宝剣の封印する力がなくなり封印が弱くなる、その時宝剣を1度回収して力を注ぎ込みもう1度祭壇に差し込むんだが、宝剣に力を注ぎ不知火神社に向かう途中、神様を護衛していた仲間の1人が急に神様達に襲いかかり、他の護衛は全員死んじゃって神様も瀕死の重傷を負い、しかも戦った場所が空だったせいかな、やつの技を食らった際に宝剣を落としてしまったらしくて宝剣の内5本が君達の地域に散らばってしまい、残りの5本の内その2本は相手が、そして3本が手元に残って、神様はどうにかLARKに戻って来て、日本では今4月だけど今年の12月31日迄に宝剣を取り戻し祭壇に納めないと完全にネクロスパイラルが開き魔界のダークネスが全て出てきて地球を魔界に変えるという忠告と宝剣を私に託して亡くられた。」

刹「そんな事があつたとは…。」

未「長くてゴメン。それで君にもう1度聞きたいんだけど、共に戦ってくれるんだよね？」

刹「ああ。俺みたいな感染者をこれ以上出したくない。そして、宝剣を探すのも、協力するよ。魔界が変わったら外で気長に昼寝出来ないからな（笑）」

未「何、その理由！？まあいいや、協力してもらえらるなら、君にさつき渡したペンダントと別にこれを渡したい。」

未「そう言う未来は左手の人差し指につけていた指輪を外し握りしめた。すると一本の刀に変わった。」

刹「これは？」

未「これは10本の宝剣の1つ《小烏丸天国》（こがらすまるあま

くに)だ。これを君に託したい。」

刹「いいのか、宝剣だぞ?」

未「君だから託したんだよ。と言っても最初の内からそれを使って特訓はしないから。怪我するし。」

刹「なるほどなあ。」 未「あとはこの2本。」

未来は左手中指と薬指の指輪を取る。すると中指からは分厚い刀身の刀が、そして薬指からは雷を纏った刀が出てきた。

未「分厚いのが《火車切広光》(かしゃぎりひろみつ)、雷を纏ったのが《雷切》(らいきり)。残っているのはわずかこれだけ。刹「そうか…。早く取り返さないとな!」

未「そうだね!とりあえず、今日は疲れたから早く寝たいんだけど、どこで寝たらいい?」

刹「俺のベッド使つていいぞ。」

未「そしたら君はどこで寝るんだ?」

刹「俺は適当に床でも気にするな。」

未「嫌だ。気にする。それだったら私は寝ない。」

刹「いやいや、俺は別にベッドじゃなくても寝れるし、女子はベッドで寝てくれ、客人みたいなものであと命の恩人だ。床に寝かす訳にはいかない。」

未「だが、君に床に寝かすのは嫌だ。あ、そうだ!」

刹「どうした?」

未「一緒のベッドで寝たらいいんだよ!」

刹「ブフォ!」

未「ちよつ、汚い!」

刹「アホか!そんな駄目だ!」 未「いいよつ!一緒のベッドで寝ないなら私は床で寝るから!」

刹「な!…、どうしても未来だけベッドじゃ駄目なのか?」

未「だゝめ!」

刹「(そんな顔されたら断れないじゃないか…。)分かったよ…、一緒に寝るよ…。」

未「それでいいのよ！」

結局一緒のベッドで寝る事になったが、女子と一緒のベッドで寝ることに緊張した刹那は結局眠れなかった。

続く

第3話（後書き）

多分元ネタが分かる人がいると思いますが暖かい目で見てください。

第4話（前書き）

今回は少し長めです。みんなにとっては短いかもしれませんがこっちは凄く長いです。

第4話

〔柳家朝〕

未「おはよう！ってどうしたの、そんなにぐったりして。」

刹「お前のせいだよ！」 未「ゴメンナサイ。」

刹「気持ちが悪くてねえー！」

未「それより今日は始業式でクラス発表なんだから早く準備して一緒にこようよ。」

刹「待て未来、まさか学校一緒なのか？」

未「当たり前えだのクラッカーだよ。」

刹「なぜ知ってる！？あと当たり前なのか！？」 未「はいはい、見事なツッコミありがとう。だけど、時間的にもマズイから早く準備しないと。」

刹「もうこんな時間！？ やべえー！！」

***** 〔学校〕

刹「あつた、俺は2年4組か。」

未「私も4組だよ。」

刹「何か力使った？」

未「いゝや、ただ学校の先生全員を洗脳して私と刹那を一緒にするようになっただけだから（笑）」

刹「使ってるじゃねえか！！」

？「おいおい、朝から元気いっぱいだなあ刹那！」

刹「お、涼りょうじゃん。おはよう。」

涼「ういーす。ってどうした！？その傷！？」

刹「階段で転んで切った。」

涼「アホだなあ。目は見えるんだろ？」

刹「どうにかな。」

涼「よかった。んで君の隣にいる美しい方はどちらかな？」

いのか？」

刹「そう言われたらそうだな。クラスはどうなんだろう…、ん？
？「お〜い！せつつな〜！！」

刹「げえ！愛花！？」

愛花は刹那を見つけると飛び込んできて、それに耐えきれなかった
刹那は愛花と共に転がる。

愛「今年も一緒だね！よろしくね！！ってどうしたのその傷！？」

刹「フガ！フガ！！（いいからどける）」

刹那が言葉を言おうにも言えないのも刹那の顔の前に愛花の豊かな
胸があり押し付けられているからである。

愛「ああん！刹那、恥ずかしいよ…。」

イラつときた刹那は愛花を押し倒す。

刹「愛花危ないだろ！1日に二度も死にかけたくないわ！まあ胸は
柔らかくて気持ちよか、ゲブンゲブン。死因が胸による窒息死なん
てやだぞ！」 愛「もお〜照れちゃって！」

刹「話をきけ〜！」

未「彼女はいつたい…。」

涼「彼女は柊愛花^{ひいらぎあい}。かの有名な柊財閥のご令嬢で俺達と幼なじみで、
愛花と刹那は許嫁なんだ。」

未「!？」

刹「それは親が勝手に決めた話で俺は認めてない。あと愛花には話
してなかったけど左目は階段から転んでその際に切った。目には異
常はないから大丈夫」

愛「うわっ、痛そう！だけど大丈夫。私は刹那がどんな姿になつて
も刹那は刹那だから。刹那となら結婚してもやっていけるから。キ
ヤッ！」

ジイ

刹「やめてくれ！せつかく途中までは感動したのに！もうこれ以上
新しいクラスからリア充は帰れみたいな目で見られたら刹那さんや
つていけなくなるから！」

未「…。」刹「どうした未来？ぼっーとして。」
未「何でもないよ！それよりも少しLHR始まるから席につこうよ。」 刹「そうだな。んじゃとりあえず、席につこうか。」

***** LHR終了後

涼「いやあく担任の栞先生若くて可愛かったなあ！」

刹「お前、もう葵先生の事を下の名で呼ぶのかよ。あとターゲットにするの早っ！」

涼「俺は女性なら上は25歳下は15歳までならストライクゾーンなんだよ！栞ちゃんは24歳！しかも可愛くてスタイル抜群！言うことなしだろ！」

刹「ハイハイ、分かった分かった。みんな学校終わったけど、これからどうする？俺は弓道部の部活があるから弓道場に向かうけど。」

涼「俺は剣道部があるから、武道場行くよ。」

愛「私は弓道場行きたいけど、今日は弓道部の新入生の勧誘しないといけないから。」

刹「やべっ！忘れてた。」

愛「だから私と刹那は弓道場に向かうとして時神さんは？」

未「私は…、弓道場に行つていいかな？弓道やった事あるからむしろ入部したい。」

愛「ホント！？それじゃあ一緒に向かおう！」

***** 弓道場

刹&愛「匠先輩こんにちは！」

匠「こんにちは。あれ、君の隣の人は？」

未「時神未来、2年生です。入部したくて来ました！」

匠「そうかそうか！これでようやく女子は5人で大会出れるな！」

未「もうレギュラー何ですか！？」

匠「女子は4人しかいないからね。あと、君は何か何とも言えないオーラがある。弓道やった事あるでしょう？」

未「確かにありますけど…。」

匠「やつぱり。中に入って弓と矢借りて20本引いて。中に女子で3年生の黒沢瞳くろさわひとみがいるから、匠が許可した。と伝えて。その後、的中数教えてほしい。」

未「分かりました。」

匠「ありがとう。んで、柳と柊は袴に着替えて1年生の勧誘に行ってくれ。特に男子を最低で3人集めてくれ！男子も5人団体で出たいからな。」

刹&愛「了解です！」

***** 射場

未「先輩方こんにちは！」

？「誰だ君は？」

未「私は時神未来。2年生でこの春転校してきました。そして弓道部に入部しに来ました。」

瞳「そうか、入部者か。私は黒沢瞳。女子部長をしている。それで射場で引いてるのが前から白石雪子しろいしゆきこ、竹野内飛鳥たけのうちのあすか。2年生では柊愛花だ。彼女らはみな生徒会で名をあげた順に書記、会計、体育委員長をしている。」

未「すごっ…。」

瞳「勉強と部活と生徒会ぐらい両立できるようになるぞ。」

未「（いや、普通は無理でしょう。）」

瞳「あと男子は男子部長の烏山匠からすやまたくみと柳刹那のみだ。ちなみに彼らも生徒会に入ってるぞ。匠と刹那は副会長をしているぞ。」 未「刹那副会長なんですか!?!」

瞳「そうだ。あと、一応私も生徒会長をやらせてもらっている。まあ、ある意味ここは第二の生徒会室だ。」

未「生徒会の生徒会による生徒会の為の部活ですね（笑）」

瞳「よく言われるよ…（笑）。君弓道の経験は？」 未「ありません。巻き藁をしていた烏山先輩から弓と矢を貸してあげてくれと言

われました。そして20本引いてくれと言われました。」

瞳「分かった、ならすぐにも貸すよ。あと全員下の名で呼んでくれ、堅苦しいのは苦手なんでね。」

未「分かりました、瞳先輩。それではすぐにも準備しますね。」
20分後

飛「ねえねえ、未来ちゃん、何本中ると思う？」 雪「多分8本！」

飛「私は10本！」

雪「よし！じゃあ賭けよう！」

瞳「こらこら、やめないか。五月蠅いぞ。」

雪&飛「は〜い。」

瞳「（とは言ったが何本中るかな、見物だな。）」

瞳「再度確認だけど矢は4本持つて、一番的から引いてくれ。引き終わったら二番で4本、三番で4本という内容で五番まで引いてくれ。いいね？」

未「分かりました。それでは。」

未来は射場に入り、矢を2本床に置く。

雪「一本目は流石に中らないでしょう。」

飛「だって古いかけへ弓を引く際に使う手袋みたいなもの〜しかサイズ合わなかったし無理でしょ。」

パーン！

雪&飛&瞳「なっ！」

パーン！

パーン！

パーン！

瞳「まさか最初でいきなり皆中へ4本引いて全部中る事〜するとは…。」その後未来は五番的3本目までは全て中るものの4本目で外した。

未「先輩すみません！かけが壊れてしまいました…。」

瞳「まさか最後の4本目で既に壊れていたのか？」

未「実際は一番的皆中の時点で壊れていたんですけど、どうにか頑張つてやつてたんですけど、最後の4本目は完全に使い物にならなかったなので無理でした。」

雪&飛&瞳「!?!」

未「先輩、かけは弁償します。いくらほど払えば…。『凄いよ!』えっ?」

雪「いきなり皆中するとは思わなかったし、しかも壊れた状態でよくあそこまで出来たよ!」

飛「あれは弓道場にあった歴代の先輩のだから気にしないでいいよ! いやあ〜ホントに凄いよ!」 瞳「私も驚いたよ。まさかここまでの持ち主とは。君はレギュラーで決定だ。雪子と飛鳥も最低でも20射18中出来るようになってもらわないとな。」

雪「ちよっ! 今でさえ14中がベストなのに!」

飛「そうだよ! 18中つて9割じゃん! そんなの出来るの瞳と未来だけだつて!」

瞳「インターハイ行きたくないのか?」

雪&飛「行きたい!」

瞳「だつたら練習あるのみ!」

雪「わかつたよ…。」

飛「努力しないと、先輩の意地を見せないと!」

瞳「未来。私達はインターハイ出場目指して頑張っているんだ。その為にも君の力を貸してもらえないか? その為だつたら、かけや弓、矢など必要な物はこちらで全て準備する。」

未「分かりました! 私の力が役に立つのなら手伝わせてください! あと、かけとかは大丈夫です。家に全てあるので明日持つてきますから。」

瞳「そうか、ならよろしく頼むよ。」

未「はい!」

この日未来は即レギュラーが決定した。

続
く

第4話（後書き）

時々弓道の話も出てきます。変な所もあると思いますが気にしないで気軽に読んでください。

第5話（前書き）

今回も4ページあります。頑張りました。え、少ない？すみません
…。

第5話

未来が弓道場にいる間刹那と愛花は正門にいた。

（正門）

刹「弓道部です！楽しいですから、ぜひ入ってください！」

愛「初心者大歓迎です！優しい先輩ばかりだよ！」

刹「なあ、愛花。一年生見事にスルーなんだが…。」

愛「ちよつとマズイね、つて刹那！左目から血が！」

刹「マジか！ちよつと顔洗ってくるから、宣伝頼む。」

愛「う、うん…。大丈夫なの？」

刹「大丈夫だつて。んじゃ行ってくる。」

*****水道

刹「うわ、水が真つ赤になってるよ。まさか眼球に傷が？」

未「それはそのコンタクトレンズのせいよ。」

刹「いつの間に来たんだよ!？」

未「刹那が顔を洗ってる間に。それでそのコンタクトは君の右目と同じ色のコンタクトにして、そのコンタクトにはGPS機能がついていて君がどこにいても私には一発で分かる。だけど副作用で体に馴染めてない間は血が出るけど気にしないでいいから。」

刹「そうか。そう言えば部活はどうなった？」

未「それが…、即レギュラーに決まって、瞳先輩が今から飛鳥先輩や雪子先輩をビシビシ鍛える為に今日は帰って、つて言われたらこうなった。」 刹「即レギュラー!？何射何中!？」

未「20射19中。」

刹「また力を使ったのか temeー！」

未「失礼な！これは実力だ！」

刹「そうか…、それはすまん…。」

未「疑われてもしょうがないよな。そう言えばふと、思ったんだが

先輩方、刹那の顔を見ても何のツッコミをいれなかったがどうして分かる？」

刹「あんぐらいじゃあ、驚かないよ。以前骨折した事があっても驚かずあえてその話には触れずにさりげなく助けてくれるんだよ。」

未「いい先輩だね。」

刹「ああ。そろそろ愛花の所に戻らないと。あいつ1人じゃ大変だからな。」

未「私も手伝う。」

刹「いや、だけどこれは俺と愛花が『いいからやらせる』はい…。」

***** 正門へ

愛「やっと帰ってきたよ、って未来も一緒なんだ。」

刹「さつき会ってな。んで宣伝手伝いんだって。」

愛「ほんと！？助かるよ！！ありがとう！」

未「私も弓道部のメンバーになったからこれぐらいはしないと。」

愛「ほんとありがとう！じゃあ、3人いるから、私は裏門行くから刹那は校内、未来は正門で宣伝しよう、そうだね30分ぐらい経ったら正門に集まるう！」

刹&未「了解！！！」

***** 校内へ

刹「流石にほとんどいないなあ…。だけど宣伝頑張るか！？」

？「あのおすみません。」

刹「ん、君は？あと何の用かな？」

薫「僕は椿薫^{つばきかほる}。弓道場ってどこにありますか？」

刹「もしかして弓道部入部してくれる！？」

薫「そのつもりです。」 刹「ありがとう！やっと男子3人で出れ

るよ!」 薫「いや、あの僕は…。」
刹「こうしちゃいられない!早く弓道場行こう!」

***** 正門

刹「新入部員見つけた!しかも男子だ!」

愛「ほんと!?凄いいじゃん!」

未「でかしたぞ!」

薫「だから、僕は…。」 涼「おい、みんなあゝ…、ぐはあ!」

刹「いきなりどうした!?!」

涼「未来が弓道着…。萌えだ…。頂きまゝす!!!」

涼はいきなりルパンダイブで未来に飛びかかる。 刹「危な!危ない!」 刹那が言い終わる前薫が未来を押し倒し代わりに涼が薫に飛び込み共に倒れる。

涼「あれ、ターゲットが変わってる…。あれ何?この感触?柔らかいな…。もしかしておっ『きゃつゝゝゝゝゝ!!!!』」
バキッ!ボキッ!ゴキッ!ゴキユ!ドカッ!

***** 刹「その…、大丈夫?」 薫「グスン、もうお嫁に行けない…。」

刹「その時は、俺がもらうから心配しないで!」 薫「え…?」

刹「だけどもあ君みたいなた子なら他のいい人に巡り会えるから大丈夫!」 薫「私は…、(あなたのお嫁さんならいいです。)

刹「?。それにしてもまさか、君が女の子とは知らなくて本当にゴメン。」

薫「いいえ、早く言えなかった僕も悪いし、あの変態をボコボコに出来たから少しはすっきりしてしてます。」

その変態こと涼はボコ雑巾としか地べたに投げ捨てられていた。

刹「にしても君は何で男装してたの?」

薫「それは僕の家訓で一番最初に産まれた者は16歳から18歳の間性別を変換して過ごす」と変な物があり僕は実行してい

るのです。この家訓を実行しない場合は二番目に産まれた者にさせるのでそれを阻止するべく僕がなりました。」 愛「ワケわからないね、その家訓。」

薫「その通りです。それでお願ひがあるのですが、弓道部入部しても男として扱ってください。そして、僕が女と言つことを絶対言わないでください。僕が女だとバレると、妹も男装しないといけなくなります。それだけは絶対にさせたくないんです！妹は幼い頃から辛い目にあつてきていてこれ以上辛い目にあわせたくないんです！」

刹「分かった、絶対に言わないよ。椿が妹想いのいいお姉さんだとよく分かったし協力させてもらうよ。俺も姉さんと妹がいるから君の気持ちはよく分かるからね。」

薫「ありがとう。」

薫は今までの事を思い出したのか泣き始めた。愛花と未来は薫を抱きしめ泣き止むまでずっと待ち続けた。

***** 薫「また改めて泣いたらスッキリしました。ありがとうございます。」

愛&未「気にしないで」 刹「よし、じゃあこれから弓道場向かって椿を『薫って呼んでください先輩』」

薫「これから先輩になるんですから先輩って呼ばせてください！よろしくお願ひします！え〜と…。」

愛「私は柊愛花！」

未「私は時神未来。」

刹「俺は柳刹那だ。」

薫「分かりました！よろしくお願ひします！柊先輩！時神先輩！刹那先輩！」

愛&未「!？」

刹「よし、んじゃ弓道場へ…、何恐い顔してるんだ二人とも？」

愛&未「何でもない！」 その後、薫を先輩に紹介した刹那達だったが家に帰るまで二人とも顔がひきつったままだった。

***** 刹那家（庭）

未「よし、これから稽古を始めるけど、その前に3つ伝える事がある。」

刹「何だ？」

未「1つ目、正直君は訓練しなくてもいい。ペンダント外して小鳥丸天国を出して。」そうわれ、人差し指の指輪を取り刀を具現化させる。そして未来も雷切と火車切広光を具現化させる。具現化させた直後未来は斬りかかる。だがその一撃を糸も簡単に防ぎ火車切広光を弾き飛ばす。

未「コレが理由。刹那、コンタクト外して、鏡を見て。」

そうわれ刹那は鏡で顔を見る。

刹「あれ、目の色が赤に変わってる……。」

未「君はヴァンパイア

に噛まれウイルスが体内にある。ヴァンパイアは争い事になると目が赤くなる。その影響で目が赤くなるんだよ。あと、ヴァンパイアの力なども得ているからペンダントを外すとヴァンパイアと同じ力が使えるんだよ。あと、今だから話すけどもう1つそのペンダントに能力があつて治癒能力があるんだよ傷ついた部分にあてると瞬時に治るんだよ。」

刹「なるほどな、これがあれば怪我をしても治す事が出来るんだな。」

未「ただし多用は止めた方がいい。治癒はしてくれるが代わりに生命エネルギーが消費されるから。あと、何度も言うがペンダントを外していられる時間は12時間だから、絶対守って。」

刹「分かった、そう言えばさっきは精霊の力を借りてなかったけどどうしたんだ？」

未「それは…、そんな事より2つ目を『言ってくれ頼む。』」

未「実は刹那の傷を治療するさいにかなりの力を使ってしまったって、治療しおえた次の日に精霊を呼びたそうと思っただけで精霊を呼

びだすどころか力を借りることすら出来なくなってた。」

刹「俺が傷を受けたばかりに力が使えなくなったのか…。本当にゴメン。」

未「いいんだって、精霊の力が使えないのは正直辛いけど、私の力で誰かの命を救えたからいいんだよ。」

刹「それでもゴメン…。」

未「大丈夫だから、力の消失は一時的だから。」 刹「よかった…。そう言えば2つ目は何を言おうと思ったんだ？」

未「2つ目は宝剣についてなんだけど、宝剣は具現化そして納め方は覚えているよな？」

刹「もちろん。具現化するには指輪を外す、納めるには宝剣の名を呼ぶんだよな。」

未「その通り。宝剣は指輪状態ならはめれる限りはいくつでもできるが具現化は1日に絶対3本まで。それ以上を越えると全ての宝剣が強制的に解除されるから、覚えといて。」

刹「分かった。」

未「話が少しそれたけど、これからは宝剣探しを主にやっていきたい。神様が宝剣を落とす寸前に式紙をつけていたから場所は大体把握しているからその付近を調べよう。それで3つ目は宝剣探しと同時に仲間を探したいんだよ。」

刹「被害を出さないためにもか？」

未「その通り。だから学校で役に立ちそうな人を見つけたら、仲間にしていこう。」

刹「了解。」

未「さして、これから…。」

刹「宝剣探しか？」

未「お腹すいたからご飯にしよう。」

刹「なんじゃそりゃ！」 未「だって言うじゃない、腹が減ったら共食いをしろって。」

刹「間違ってるぞ、それ！分かった、飯にしよう。」

未「わーい！」

刹「（未来の性格イマイチわからないな、真面目になるときもあればかなりはっちゃけて、こんなのが警備やってたやつかと思うと世も末だな……。）」

家に帰りながら刹那は思った。だが、刹那は気づいてなかった。これから始まる戦いに。

続く

第5話（後書き）

いろいろと内容を詰めすぎて分かりづらくてすみません。少しでも早く文章をまとめられるように頑張ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7705x/>

深紅の瞳

2011年11月2日15時06分発行